

【演題名】 小児 ALL 治療におけるビンクリスチン投与中に便秘を発症した 5 症例の検討

兵庫県立尼崎総合医療センター

○和田 隼斗、花原 大志、本上 ほなみ、永井 浩章、廣瀬 晃子
太田 あづさ、河原 香織、佐倉 小百合、辻本 純子

【背景・目的】

小児がん治療において便秘は QOL に影響を与える大きな問題のひとつである。また小児では便秘の自覚症状の訴えが乏しく、症状が重篤化する前に発見することが課題となる。今回、主な副作用に便秘や末梢神経障害があるビンクリスチン（以下 VCR）を含む治療を行った急性リンパ性白血病（以下 ALL）患者の便秘発現状況について調査を行ったので報告する。

【方法】

調査期間は 2017 年 10 月～2021 年 3 月で、JPLSG ALL-B12 再寛解導入療法を施行した 9 例のうち、酸化 Mg/ピコスルファート Na では排便コントロール不良であり便秘薬の追加を要した患児の年齢、性別、経過、VCR 投与開始から便秘の発症時期、期間、治療への影響、追加した便秘薬の種類について電子カルテを用いて後方視的に調査した。

【結果】

該当患者は 9 例中 5 例、年齢中央値は 3.5（2-7）歳、性別は男児 4 例、女児 1 例、再寛解導入療法施行の中央値は 2(2-3)コースであった。VCR 投与後の便秘発症時期は 6.4±4.0days で、便秘期間は 4.6±1.6days、内 2 例では便秘が原因で治療が延期となり、便貯留による横隔膜挙上にて酸素化不良を呈した症例が 1 例あった。追加した便秘薬は、モビコール®:3 例、マグコロール P®:2 例、大建中湯/パントール®/アミティーザ®:1 例であった。

【考察】

再寛解導入療法における排便コントロールは重要であると考え。VCR の自律神経障害により便秘が誘発されるが、抗がん剤治療による倦怠感や感染予防のための移動制限による運動不足、ステロイド併用による食欲亢進も便秘の重篤化に影響したと考える。週に数回排便があっても著明な便貯留を認めた症例もあり、排便回数だけではなく、便の量・性状等も評価し、患者に適した便秘薬を提案する必要があると考える。今後も医師・看護師と協働して副作用の早期発見に努め、患児や家族に安心して治療を行ってもらえるようにしたい。